

# 表現力と人間性を高める総合的表現活動の実践

## — オペレッタ上演から何を学ぶか —

### Putting into Practice the Comprehensive Artistic Activities to Expressive Capability and Improve Humanity

#### — What to Learn from the Staging of an Operetta —

小澤 和 恵

(こども学科 専任教員)

#### 要旨

本学では、「保育内容指導演法」において5領域の分野の指導演法について学び、総合的な指導演法については2年次後期「保育内容応用指導演法」という授業で学ぶ。その成果を、「表現発表会」(2004年度より3回実施)という形で発表してきた。そこで、総合表現であるオペレッタ上演に取り組み、「表現発表会」の目的でもある、表現力と創造性を高め、さらに協力し合う姿勢を養い、幼児教育者としての資質を高めていくことをめざした。オペレッタ上演までの過程において、学生が協力して一つのもの作りあげる難しさと喜びを知り、本番での発表が達成感と共に大きな感動を生み出し人間的成長につながったという実践報告である。

[Keywords: operetta, expression, humanity, sensibility, comprehensive activities.]

[キーワード: オペレッタ 表現 人間性 感性 総合的活動]

#### はじめに

本学では、「保育内容指導演法」において5領域の分野の指導演法について学び、総合的な指導演法については「保育内容応用指導演法」という授業で学ぶ。またその成果を、「表現発表会」(2004年度より3回実施)という形で発表してきた。その中で、私は総合表現であるオペレッタ上演に取り組み、「演じる」、「歌う」、そして舞台上で発表することで、「表現発表会」の目的でもある、表現力と創造性を高め、さらに協力し合う姿勢を養い、幼児教育者としての資質を高めていくことをめざした。その取り組みと実践の中で、学生とともに得たものは何かを報告し、保育士、幼児教育者育成のために今後どのような表現活動を展開していくのか考察したい。

#### I. 授業から表現発表会

##### (1) 本学の『表現』に関わる授業概要

本学では、5領域における「保育内容指導演法」という授業がおかれ、『表現』の分野については、「表現A」(音楽的活動)、「表現B」(身体的活動)、「表現C」(造形的活動)に別れている。さらにより発展的かつ総合的な学習を図る内容の「保育内容応用指導演法」があり、数人の教員がそれぞれのテーマ、活動を提示し、学生は興味のある時間を履修する。

その中で私が取り組んだのがオペレッタであり、そ

の理由は、保育内容5領域の総合的活動としてふさわしいと考えたからである。また、表現力や創造力が乏しいと言われる今の学生たちにとって、良い体験となると思ったからである。

##### (2) 表現発表会の目的

表現発表会は、はじめにでも述べたが、「表現力と創造性を高め、さらに協力し合う姿勢を養い、幼児教育者としての資質を高めていくこと」を目的として2004年度より行っている。2005年度には、当時学長より「表現発表会について(試論)」が提出され、表現発表会の目的については以下のように提案されている。

① 表現発表会の課題と取り組むことにより、豊かな人間性を養い、豊かな文化内容を身につけ、表現力に富み、すぐれた保育内容やこども文化などを自ら創造的に発信できる保育者、教育者となるための資質や能力を身につける。

② 表現発表会という企画の立案、準備、運営、発表に取り組み、集団の中の一員として協力して自主的な活動を行うことにより、自己理解や他者理解を深め、相互に豊かな人間性を育て合っていくとともに、企画力、運営力、組織力、共同作業力などの、保育者、教育者に求められる能力を身につける。

##### (3) 授業と表現発表会の関連性

表現発表会は、2年生の後期に置かれている「保育

内容応用指導法」の成果発表を中心として行うこととした。1年生については、基礎技能科目である「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」の中で取り組んだ合唱曲を発表しているが、あわせて2年生の発表をサポートすることにより、文化的行事の運営を理解しながら実践力を身につけること、また2年生の発表を鑑賞することにより、表現活動への意欲付けと表現活動を受感する力をつけることが主たるねらいである。

## Ⅱ. 一実践報告－3年間の取り組み

### (1) 2004年度

第1回表現発表会を開催する事になり、4月のオリエンテーションで日程とおおまかな内容を発表。後期になり「保育内容応用指導法」担当教員より改めて授業内容レジメを発表。学生はやってみたい内容に希望を出し若干の人数調整後履修。その後の活動は、各授業の中で担当教員指導のもと取り組まれた。「オペレッタチーム」履修者は19名

#### ①演目の決定

内容のある作品に取り組みたいということを学生に提案し、いくつかの作品の中から相談の結果「うばすて」（日本昔話・永山友美子台本作曲）に決定した。

#### ②作品の理解と役決め

「うばすて」（「うばすて山」）は日本各地に伝わる民話である。まず、昔話集や民話集、それから絵本になったものなどをいくつかを探し、このお話についての理解を深めた。それと同時に台本をみんなで読み合い、登場人物について話し合い、配役とピアノ伴奏者を決めた。

このオペレッタの作曲者でもある永山友美子先生が台本<sup>(1)</sup>のあとがきにも書かれている通り、3つのなごときの中で「二頭の牝馬姿形そっくりの、どちらがむすめで母親か～」の部分に最も共感した。幼児虐待、自分の子を餓死させてしまうようなニュースが後を絶たない今の世の中、「必ず先に子が食べる 親はそれを見守るよ」この台詞を大切に歌いたいという声が多かった。

#### ③練習と準備

初めての表現発表会にむけての取り組みということでスタート時は、表現発表会で何とか体裁の良い形にしようとする進め方の部分もあったかもしれないが、幸いにも、作曲者である永山先生を外部講師としてお迎えし指導いただくことができ、学生とともに変わった事が多くあった。たとえば、「おかあさん」という歌詞が繰り返されるシーンで、「うまく歌おうなんて

思わなくて良い、たった5文字の言葉だけれど、誰にでもいるおかあさんを思って歌うこと、言葉は言葉である」という事。また、「台本（楽譜）から離れよう、子どもたちは字や楽譜を読んで演じるわけではないのだから、台本どおりにやろうと思わないで、その場面その場面を考えて出てくる言葉、やりとりが大切である」という事などである。体裁を整えることより、心から出てくる言葉や演技にしていくことを大切にしていって取り組みに変化していくことができた。

#### ④表現発表会で上演してみても良かった点と課題

成果のある発表であった。このお話の内容はしっかり伝わり、「おかあさん」が連呼される場面では会場よりすすり泣く声も聞こえてきた。上演を終えた学生も感極まっており、表現する喜びと達成感を十分味わったようだった。

結果的に、保育内容の総合的な表現になっていたと思う。また、表現力が乏しい、声が出ないと言われる今の学生たちが、舞台上でマイクなしでもきちんと言葉を届け、感動を与えられる表現をしたことは大変意義があり、自信にもなったと思う。はじめての表現発表会への取り組みということで時間が足りなく、小道具作りなどにももっと創造的な活動の時間がほしかった点とやや教員主体で練習を進めてしまった点が次年度への課題と感じた。

### (2) 2005年度

2004年度同様の予定と内容で第2回表現発表会を開催する事になり、開催にむけてのアナウンス、スケジュールも同様に進められた。「オペレッタチーム」履修者は42名

#### ①演目の決定

演目を選ぶ時の考え方は2004年度と同じく、内容のある作品に取り組みたいということで学生に提案し、いくつかの作品の中から相談の結果「100万回生きたねこ」（佐野洋子原作・永山友美子台本作曲）に決定した。また、紹介した「ペロ出しチョンマ」（斎藤隆介作）のお話に数人が大きな感銘を受けどうしても演じてみたいということになり、それに共感した学生は「ペロ出しチョンマ」（斎藤隆介作）を演じる事になった。

#### ②作品の理解と役決め

「100万回生きたねこ」グループ（34名）は、このオリジナル絵本をすでに知っていた学生がほとんどであったが、その絵本とオペレッタ台本を中心に作品について話し合った。場面ごとに違う環境で登場する主人公猫のシチュエーションと繰り返される死の場面の

表現、そして最終場面でこの作品の心に残るメッセージが伝えられる表現にしたいということになった。いくつかある場面から「プロローグー王様ー船乗りーサーカスーどろぼうーのらねこーフィナーレ」の場面を演じることとして配役とピアノ伴奏者を決めた。

「ベロ出しチョンマ」グループ（8名）は、原作を読むことと、三木稔作曲、歌楽ー歌い語りと二十絃箏（またはピアノ）による「ベロ出しチョンマ」を参考にした。語り（1人）がお話を進める朗読劇を基本として、演じる上で必要な役6人を配役して、ピアノ伴奏者を決めた。歌楽「ベロ出しチョンマ」で三木稔氏の紹介文にある小西正保氏の解説<sup>(2)</sup>「チョンマは、おのれが誰かの犠牲になるという特別な悲壮感もなければ、他者への献身するということへのヒロイックな決意もない。ただ、みずからの肌の痛みよりも他人の痛みの方が、より痛切な自分自身への痛みとして感じられるという天性のやさしいこころねのわらしこである」がこの演目のテーマになり、主人公である長松（チョンマ）のおかしさこそが、この作品の底知れぬ悲しさとメッセージを伝えることになると話し合った。

### ③練習と準備

「100万回生きたねこ」グループは、主役のトラ猫と結婚する白い猫と、場面によって分けた「王様兵隊チーム」「船乗りチーム」「サーカスチーム」「どろぼうチーム」「のら猫子猫チーム」ごとに学生主体で練習が進んだ。練習する中で、この台本はせりふが少なく、ストーリーが合唱で進んでいくオペレッタというより音楽劇であるので、ストーリーをしっかりと伝えるためにも、担当したチームの場面では演じる事に専念し、それ以外の場面ではしっかりと合唱してストーリーを伝えていく事にした。教員からは、合唱指導をする中で学生の意見を聞きながら歌い方のアドバイスをする程度とした。小道具、衣装についても、チームごとにデッサンやスケッチを書きながら進められ、形になっていく過程の中で学生たちは生き生きと参加していた。

「ベロ出しチョンマ」グループは、朗読がお話を進めていく朗読劇として、長松・ウメ・父・母・役人2人の配役が、必要な場面で演じ、音楽は、三木稔作曲、歌楽ー歌い語りと二十絃箏（またはピアノ）による「ベロ出しチョンマ」より、歌（チョンマの歌）をテーマソングとしてオープニングとエンディングで歌った。また、いくつかの間奏曲の一部を場面にあわせてBGMとしてピアノで演奏をし、劇の効果をあげ

た。小道具、衣装については、お話の時代を考え、特に髪型、衣装、小道具（桶）、大道具（はりつけ台）などは本の挿絵などを参考に大変苦勞したところである。同じく、朗読部分やせりふでも、昔の言葉が出てきて、言い方や意味について調べたり話し合いをした。最後のシーンで、おもしろいだけでも、悲しいだけでも表現できない場面が一番難しかった。

### ④表現発表会で上演してみた（良かった点と課題）

発表内容は、2作品とも作品の良さが充分表現された良い発表だった。演じた学生たちも、観客の学生も大いに感動していたようだった。今回は、小道具作り、衣装作り、舞台構成などを含め練習、準備を学生主体で進めていったが、多くの意見やアイデアが出て、仕上がりは私の想像以上のものであった。良い作品と出会い、学生自身がその作品に感動し、それを伝えたいと思うことが、結果的に学生の創造性と感性を高め、すばらしい仕上がりになるということを実感できた。この年度は表現発表会后、学生よりアンケートをとった。その内容と結果は以下の通りである。

#### <アンケート結果>

履修者 42名 アンケート回収 40名

※自由記述だが、同傾向意見をまとめ結果は下記のとおりである（複数回答あり）

#### 1. オペレッタを選んだ理由

- ・オペレッタを体験してみたかったから、楽しそうだから 23名
- ・昨年オペレッタをみて感動したから 21名
- ・歌うこと、音楽が好きだから 6名
- ・先生の授業を受けたかったから 5名
- ・みんなで一つのものを作り上げたいから 2名
- ・就職先でオペレッタが盛んだから 1名

オペレッタを選んだ理由は、昨年度の表現発表会でのオペレッタ上演を見て感動し、オペレッタに興味を持ちやってみたいと思って選んでいる事がわかる。鑑賞体験が表現意欲につながったと言える。昨年度より履修者が多かった理由でもあるだろう。

#### 2. 「ベロ出しチョンマ」・「100万回生きたねこ」を選んだ理由

「ベロ出しチョンマ」を選んだ理由

（「ベロ出しチョンマ」グループアンケート回収8名）

- ・このお話を知って感動したから 8名
- ・ぜひ他の人にも知ってもらいたいから 4名
- ・登場人物に心打たれたから 2名

「100万回生きたねこ」を選んだ理由

（「100万回生きたねこ」グループアンケート

回収 32 名)

- ・この作品を知っていたから、好きだったから 17 名
- ・この作品を知って好きになったから、興味が出たから 10 名
- ・場面も多く、人数が多いからこそできる作品だから 5 名
- ・オープニングの歌を聴いて気に入ったので 1 名
- ・猫が登場するので 1 名
- ・友だちが選んだから 1 名

作品を選んだ理由は、演目の選定でも書いたように、「ペロ出しチョンマ」は作品を知って感動したから選んでおり、「100 万回生きたねこ」はすでに作品の良さを知っていたのでオペレッタでやってみたくと思った事がわかる。どちらも、作品に共感して自分たちで表現し、みんなに伝えたいという気持ちをもって取り組んだことがわかる。

### 3. 練習過程で工夫した事 (演出・表現法・大道具、小道具作り・衣装 その他)

この項目については、それぞれの作品の様々な場面でアイデアを出し合い工夫したことがたくさん書かれていた。演出については、登場人物や動物に見えるための工夫、場面の雰囲気を出すためにいろいろと試行錯誤した様子がうかがえた。具体的には照明や効果音の使い方、衣装やメイクについて、大道具小道具作りでさまざまな工夫をしていた。表現については、表現するということの難しさを感じながらも、伝わる声の出し方、何をしているのかわかる動きや立ち位置、表情の大切さなどをたくさん感じ学び取ったことが伝わる内容であった。

### 4. 反省点

上の 3 の項目で書かれた内容について十分でなかった点が書かれてあり、主に表現力不足、準備不足、練習不足というような内容であった。このような総合芸術的活動において、これで良いということはないわけであるが、さらなる豊かな表現のために貴重な多くの気づきがあったようだ。

### 5. この表現の中で得たものは何ですか

- ・チームワークの大切さ (話し合う、協力する) 23 名
- ・作り上げていく大変さと楽しさ、達成感 17 名
- ・表現力 (表現をする難しさと楽しさ) 14 名
- ・先生に指導してもらった事 5 名
- ・オペレッタを体験できた事 5 名
- ・本番の体験 4 名

- ・衣装、大道具小道具の製作方法や演出方法 4 名
- ・人に感動を与える 3 名
- ・作品の理解と作品からのメッセージ 3 名
- ・音楽の楽しさ 2 名

みんなでひとつの物を作り上げる達成感は何よりの財産になったようである。また、表現するということの難しさと楽しさを体験的に得たことは大きいと思う。

次年度への課題は、さらに学生主動の準備、練習が形になるように考えたいと思った。

### (3) 2006 年度

2004 年度、2005 年度同様の予定と内容で第 3 回表現発表会を開催する事になり、開催にむけてのアナウンス、スケジュールも過去 2 年と同様に進められた。「オペレッタチーム」履修者は 51 名

#### ① 演目の決定

演目を選ぶ時の考え方は、過去 2 年と同じく、内容のある作品に取り組みたいということで学生に提案し、紹介したいくつかの作品の中から「こうし」(新美南吉原作・永山友美子台本作曲)、「花さき山」(斎藤隆介原作・永山友美子作詞、作曲、脚本)に決定した。また、作品選びから自分たちでしたいというグループがあり、「どろぼう家族」(マーガレット・メイヒー作・井戸和秀脚色、作詞、作曲)を選んできた。

#### ② 作品の理解と役決め

一コマの授業で 3 グループに分かれ 3 作品に取り組む事になった。「こうし」グループ (13 名)「どろぼう家族」グループ (15 名)「花さき山」グループ (23 名)に分かれ、台本の読み合わせをし、学生間で役決めをした。あわせて、作品のメッセージや何を表現したいかをみつけるよう話し合わせた。話し合いを進めていくなかで、3 作品に共通するテーマが見つかった。話の登場人物が親子であったり兄弟であったりということで、テーマは「家族」、3 作品から「家族」について考えていこうという事になり、オムニバス形式で演じる事にした。

#### ③ 練習と準備

今年度はさらに学生主動で進めることを伝えて、チームリーダーと会計という役割を置いた。チームリーダーは練習や準備を主となって進め、取り組み状況を把握して教員との連絡に当たる。会計は経費を予算内で進めていく係である。また、履修学生全員に「取り組み表」(資料 1) を配布した。毎回この取り組み表を書いてもらうことによって、進捗状況や取り組み

状況を各自意識できることと、自分たちで作りあげている意識ができると考えた。実際、一回一回の授業で何を話し合い、何を進めたかがわかった。うまくいった点やうまくいかない点も書かれてあったので、次の授業での課題認識もできたようだ。毎回これを提出してもらい、私からは適時アドバイスを書き込んだ。

(資料1)

保育内容応用指習法(オペレッタチーム) 取り組み表		
演目	学籍番号	氏名
月/日	話し合った事	気づいたこと・感想

④表現発表会で上演してみて(良かった点と課題点)

「家族」をテーマに3作品の伝えたいことが十分に伝わる発表となった。



「こうし」



「どろぼう家族」



「花さき山」

<アンケート結果>

履修者 51名 アンケート回収 40名

※自由記述だが、同傾向意見をまとめ結果は下記のとおりである(複数回答あり)

1. オペレッタを選んだ理由

- ・ 昨年のオペレッタをみて自分もやりたいと思った 23名
- ・ 楽しそうなので 7名
- ・ 劇やオペレッタに興味があったので 6名
- ・ みんなで一つのものを作り上げたいから 5名
- ・ 保育の現場で(就職して)役に立つと思ったから 4名
- ・ 思い出になると思って 3名
- ・ 舞台上で演じる事が好きだから 2名
- ・ 歌うこと、音楽が好きだから 1名
- ・ 先生の授業を受けたかったから 1名
- ・ 友だちが選んだから 1名

オペレッタを選んだ理由は、2005年度のアンケート同様に前年度の発表を見て感動し、興味を持ち選んでいる事がわかる。「先輩の表現する姿にあこがれた」、「自分もあのように表現を楽しみたい」という記述も同傾向の回答に含めたが、記述されたニュアンスが微妙に違う点は興味深い。おそらく2005年度のタイプのちがう2作品による学生の発表が大変のびやかだったことで、同じ学生として自分もできるのではないかと表現の可能性を感じたのではないかと推測できる。表現のすばらしさを観衆として知り、表現をしたいという意欲を高めることができていることは明らかだと感じた。

2. 「こうし」・「どろぼう家族」・「花さき山」を選んだ理由

「こうし」を選んだ理由

(「こうし」グループアンケート回収 11名)

- ・ このお話の内容が良かったから 8名
- ・ 動物が出てくる作品だったから 3名
- ・ クラスの多くが希望したから…しかしこの作品にして良かった 2名

「どろぼう家族」を選んだ理由 (「どろぼう家族」グループアンケート回収 12名)

- ・ このお話のテーマ「家族」について考えたかったから 7名
- ・ みんなで選んだから 4名
- ・ 登場人数が適切だったから 3名

「花さき山」を選んだ理由

(「花さき山」グループアンケート回収 17名)

- ・ お話の内容に共感したから 14名
- ・ 候補になった作品の中で一番気に入ったから 1名
- ・ 花の精になってみたかったから 1名

- ・クラスの多くが希望したから…どの作品でもやってみてみたかった 1名

### 3. 練習過程で工夫した事

今年度のこの項目については、授業毎に提出された取り組み表に書かれていた内容の総括的なものだった。「どろぼう家族」と「花さき山」はほぼ台本どおりであったが、「こうし」は、白鳥と鹿が出てくる空想シーンの演出にオリジナリティを出したので、その場面の演技や挿入曲導入にずいぶん工夫をした。どのグループも次々出てくる問題点を話し合いと協力によって解決していく様子が、ここに書かれた内容と取り組み表からうかがい知ることができた。

### 4. 反省点

この項目で書かれた内容については2005年度とほぼ同様の内容であったが、表現内容の充実と共に、表現要求の高まりが感じられる記述が多くなった。「もっと客観的な視点から動きを考えられれば良かった」「もっと感情を込めた表現をしたかった」など。このような体験的気づきでは貴重であり、自己評価力の向上に繋がることである。

### 5. この表現の中で得たものは何ですか

- ・チームワークの大切さ（話し合う、協力する） 25名
- ・作り上げていく大変さと楽しさ・達成感 22名
- ・表現力（表現をする難しさと楽しさ） 15名
- ・オペレッタを体験できた事、オペレッタの楽しさがわかった 6名
- ・衣装、大道具小道具の製作方法や演出方法 3名
- ・本番の体験 2名
- ・人に感動を与える喜び 2名
- ・作品の理解と作品からのメッセージ 2名
- ・友だち関係が深まった、 2名
- ・積極的にやること、自信がついた 各1名

学生がこの表現の中で得たものは何かを集約すると「みんなで協力してひとつのものを作り上げる喜びと達成感、そして表現するということの難しさと楽しさ」ということになるのではないか。それは、取り組む過程と発表する場面があるからこそ得られるものである。また、学生主体の話し合い、取り組みの路線を貫いたこの年度の特徴として、「お互いにアドバイスをし合って高めていくことができた」「自分の意見を持つすばらしさと、他の人の考えや意見知れたことが良かった」など、チームワークの大切さに含んだ回答が多くあったことである。

### Ⅲ. オペレッタ上演から何を学ぶか

オペレッタが、表現力を高める総合的表現活動になりえるためにはまず、良い作品を選び、その作品を理解することが重要である。現代の子どものおかれている環境や人間関係などをかんがみて、忘れかけている良いものを再認識して、大切なものを見つけられるような作品を選び、その作品から感じた大切なメッセージを十分に感受し演じることである。そこに描かれている大切な感情や言葉を擬似体験する中で感性が育まれ、創造力がかきたてられ結果的に表現力を豊かにすることができる。練習の過程において、作品の中の一言のせりふ、ワンフレーズの歌に、優しさや懐かしさや沸き立つ感情を持つ場面が何度もあり、この感情こそが表現の源となっていた。

そしてオペレッタ上演によって得るもうひとつのものは、協調性・社会性である。希薄な人間関係が懸念される今、協力してひとつの作品を作り上げる過程の中で、自己を主張する力と他者を理解する力が養われる。それは、アンケートの「得たものはなんですか」に書かれた記述からも十分にうかがい知れたことで、協調性・社会性を高めながら、問題解決能力や課題遂行能力を身につけ、しいては人間性を磨く良い機会となりえたと感じている。

### 最後に

3年間取り組んだオペレッタ上演の中で、学生と共に多くの大切なものを得た。良い作品に出会い、表現することは「人間ってすてき」「生きるってすばらしい」ということを実感することでもあった。手をかざせば水の出る水道、何も触れなくも開閉する自動ドア、物は豊かに、生活はどんどん便利になっているが、心や感性は逆に貧しくなっている。そのような時代に生まれてきている子どもたちに、感じる心を育て、生きる力や喜びを伝えられるような表現活動を考えていきたい。そして、見るものにもそれが伝わることを期待したい。

永山友美子先生との出会いが、オペレッタに取り組もうとしたきっかけになりました。先生から紹介された数々の良い作品とアドバイスに感謝したいと思います。

引用文献

- (1) 永山友美子オペレッタシリーズ 10  
あいのおはなし「うばすて」
- (2) 三木 稔 歌楽「ペロ出しチョンマ」  
斎藤隆介作 全音楽譜出版社

上演作品

2004 年度

「うばすて」

永山友美子オペレッタシリーズ 10 あいのおはなし

2005 年度 「100 万回生きたねこ」

永山友美子オペレッタシリーズ 2 ふれあいのおはなし

「ペロ出しチョンマ」 斎藤隆介作 (新・名作の愛蔵版) 理論社

2006 年度

「こうし」 新美南吉作 永山友美子作曲

みんなのできる子どもオペレッタ (初級編) 汐文社

「どろぼう家族」 井戸和秀作曲

たのしいオペレッタ集 2 音楽之友社

「花さき山」 永山友美子オペレッタシリーズ 1

日本のおはなし